

# 愚考古考学

③

## 五所明神と貿易船

中 林 幸 夫

(会員・佐伯市長島町)

徳川幕府は、三百年の鎖国政策をとったが、海国日本人の血は騒いで、各藩や商人は世界に目を向け、密貿易を行っていた。

大分県も、大友宗麟の時代までは、堂々と外国と交渉を持っていたことは明白であるが、その後の三百年ははっきりしないし、佐伯については、ましてそれを裏付ける証拠はあまりない。

私は、故人となられた五所明神社の橋佐古宮司と語りあったことを簡単に思い出して書いてみようと思う。

五所明神の現存の石の鳥居は、日豊線の鉄道敷設時に後ろに移動させたもので、昔、鳥居が建っていたのは日坪川の端で、そこには石垣があり、今でも堀ればかきついた石垣があるはずで、その場所まで貿易船の入港が可能であり、五所明神から先の海岸は、岩肌で着船が無

理であった。だから貿易船のような船は、明神さんの下あたりに着いたはずである。

しかし、そのような事を裏付けるものは、明神社が二回の大火で焼失しており、記録等は何もない。以前の本殿は、今のものより大きかったことは確かであると聞かされた。そこで、私は以前の焼失した社殿のものを探すため、同社の周辺を少し掘らせてもらった。

その結果、焼けて赤茶けた瓦の裏に大阪甚兵衛の銘のあるものを一枚掘り出した。

私は大阪甚兵衛の銘から、社の建立にあたり同人が瓦を寄進したか、それとも大阪で焼かれた瓦を誰かが船で大阪から運んで来たものと想像し、いずれにしろ大阪の人物で、明神社に縁のある人物と想定した。

(このことについては清田先生にお話して、瓦を見てい

ただきたくお渡した」。

そこで、何故大阪の人が、明神さんに瓦を寄進したかについて疑問を持った。以来、何か手掛りはないだろうかと探し、発見したのが、今も境内に現存する六角井戸である。

昔の遠洋航海に最も必要だったのは良質の水である。謎は解けた。水を載いたお札に寄進したのである。私の知る範囲では、六角井戸は南蛮貿易ゆかりの平戸と瀬戸内からも発見されており、まだ発見されていないものが多数あると考えられる。このことから、私は水を補給していた船は、貿易等に従事していた船であると断定できると確信している。

それに加えて最近気付いたことであるが、同社に現存する古い方の御影石の手洗いに、寛文十四年（今から約三百年前の一六六八年）と、ほかに江戸と読める字があることから、これを寄進したのも江戸に関係ある人物であり、多分、この人物も水を載くお札であったと思われる。

このような短絡的なことを結び合せると、  
江戸―太平洋回り―佐伯―外国行き

大阪―瀬戸内回り―佐伯―外国行き

の航路があり、両航路も船とも佐伯を水の最終補給地としていたのではなからうか。

船頭町に港が移ったのはそれ以後である。その頃の船頭は佐伯港と呼ばずに、五所明神とか臼坪とか呼び、五所と臼坪のつばは補給基地の「壺」の意がありそうに思える。

これは余談になるが、故人は佐伯人の信仰心の薄いのを嘆いておられた。

思えば、私が前回投稿した「走り百姓」等のことが事実であれば、住民は真に領主を敬まわず、領主の敬まう神への信仰心にも影響したのではなからうか。

